

49. カワウによる内水面漁業の影響

福島県内水面水産試験場 調査部
平成14年度 事業報告書
分類コード 19-08-22650600

部門名 水産業－内水面（増養殖）－内水面漁業、その他漁種（内水面）
担当者 鈴木 信・廣瀬 充

I 新技術の解説

1 要旨

カワウは魚食性の大型水鳥であり、近年、関東以南で異常繁殖した。本県では、平成11年以降に急激に羽数が増えて、阿武隈川水系と阿賀川水系にそれぞれ数百羽が飛来しており、埒(ねぐら)と営巣地も確認された。また、現在、県内では夏季に1,000羽を超えるとされており、羽数の増加と飛来地の拡散及び営巣地の分散が懸念される。このため、カワウによる内水面漁業の被害防止とカワウの鳥獣等行政を行うため、その影響を把握することが急務となった。当時はカワウによる内水面漁業への影響調査を担当したのでその結果を報告する。

(1) 飛来水系の内水面漁獲量の減少（川魚が捕れない現実）

カワウ飛来河川の阿武隈川水系は、平成6年の漁獲量が約400tであったが平成14年には270tに減少した。魚種別ではウグイとコイが減少している傾向がみられる。阿賀川水系は平成元年が約350tであったが平成14年には130tに大きく減少した。魚種別ではアユ、ウグイが最盛期の10%以下に激減した。また、平成11年以降の減少はカワウによる影響が大きいとみられる。一方、飛来のない久慈川水系は漁獲量の年変動がやや大きい、アユ、ウグイをみると、平成12年以降の漁獲量はむしろ増加傾向にある。

(2) ウグイ漁獲量の減少（ウグイ食文化の危機）

産卵期のウグイは会津地方では「アカハラ」と称されており、春を告げる食材として珍重されている。瀬付けウグイの漁獲量について、カワウ飛来河川の4漁協と飛来しない3漁協にアンケート調査した。飛来する4漁協はカワウが飛来した平成11年度以降にいずれも漁獲量が大きく減少しており、平均値をみると平成14年度では基準年の24%に激減した。一方、飛来のない3漁協は全体的に100%を大きく下回る状況は認められない。

(3) 遊漁料収入の減少（漁協経営の危機）

遊漁券発行実績について、前項の漁協を調査した。飛来がある4漁協はいずれも県全体の数値を下回っており、取りわけ、カワウの食害を受けやすい開けた河川環境にあるB漁協は平成14年度には14%まで激減した。一方、飛来のない3漁協は基準年を大きく下回る状況は認められない。

(4) 魚類相調査（川の中で何が起きているか）

飛来河川の阿賀川（2定点）と飛来のない伊南川（1定点）において、瀬と淵が連続する100m区間（河床型Bb、アユ等優良釣り場）を6月に潜水調査した。阿賀川は2定点とも1週間前にアユが放流されたが数尾の確認に止まった外、10cm前後のウグイが100尾以下と極めて少なかった。一方、伊南川は数百尾のアユと1,000尾以上のウグイが確認されており、ウグイの大きさは偏りも認められない。

2 期待される効果

関連する県政施策の基礎データとして利活用される。

3 適用範囲

カワウ飛来地域（県下全域）

4 普及上の留意点

カワウによる内水面漁業の影響と被害を十分に認識する必要がある。

II 具体的データ

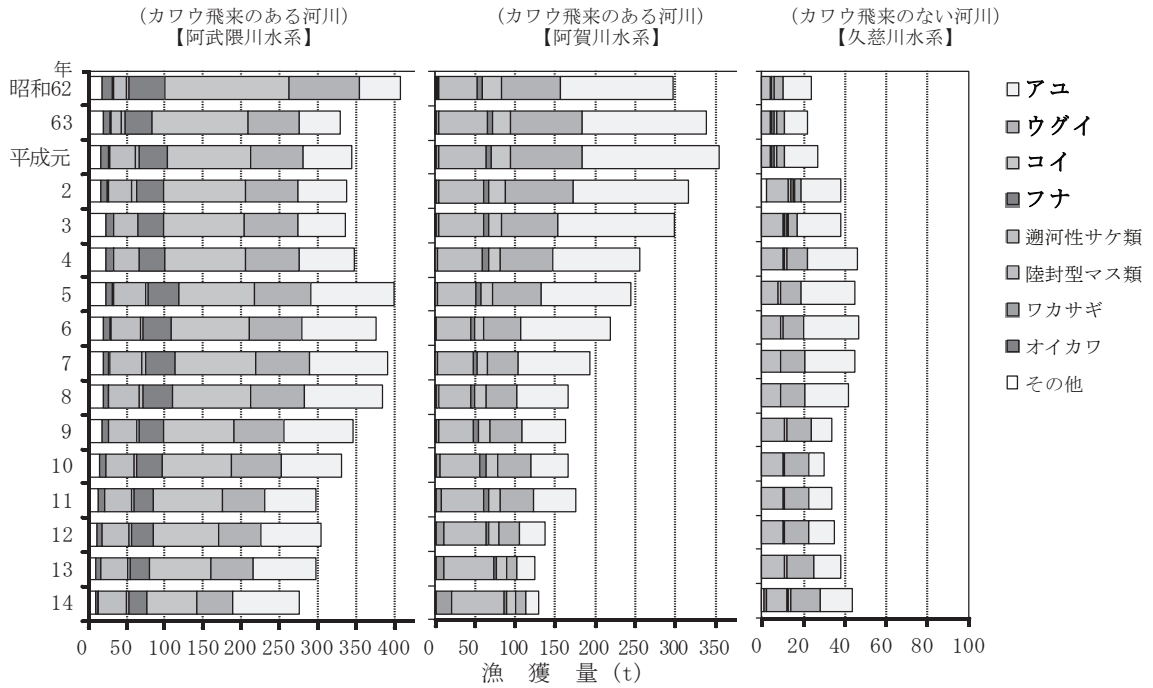
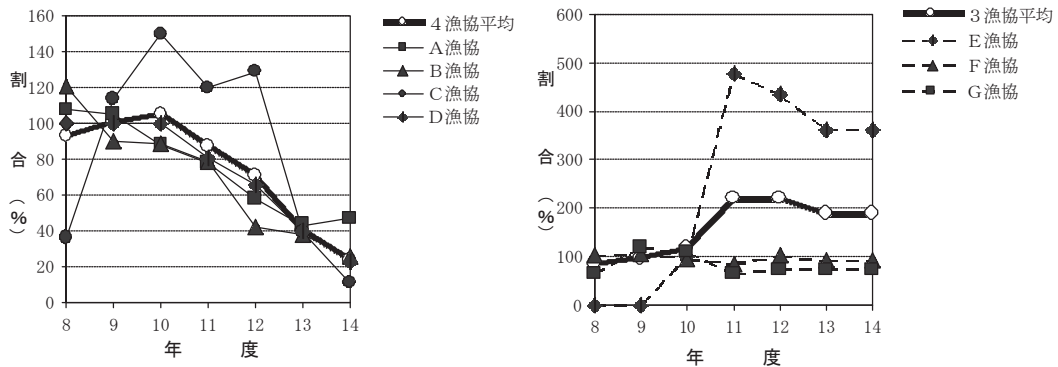


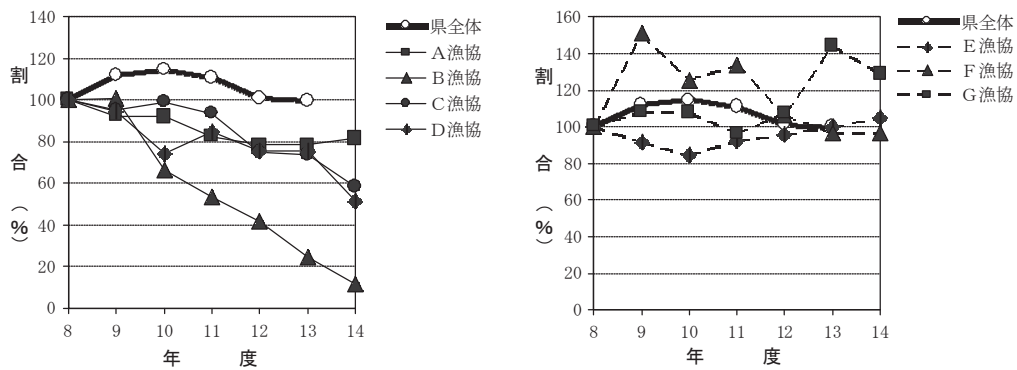
図 水系別漁獲量の変化 (出典；福島県農林水産統計年報)



【カワウ飛来のある河川漁協】

【カワウ飛来のない河川漁協】

図 瀬付けウグイの漁獲量の変化



【カワウ飛来のある河川漁協】

【カワウ飛来のない河川漁協】

図 河川漁協の遊漁券販売実績の変化

- III その他
1 執筆者 : 鈴木 信
2 その他の資料等 : なし